

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 15 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25243001

研究課題名(和文) 時系列データの蓄積から社会変動モデルの構築へ：中国第三次四都市調査の挑戦

研究課題名(英文) From Accumulation of Time Series Data to the Creation of Social Change Model:
Challenges of Third Wave of Four City Survey in China

研究代表者

園田 茂人 (Sonoda, Shigeto)

東京大学・大学院情報学環・教授

研究者番号：10206683

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 16,100,000円

研究成果の概要(和文)：1998年、2006年と8年おきに行われてきた中国四都市(天津、上海、重慶、広州)を対象にした調査の、第三波調査を2014年に実施。各都市で1000サンプル規模の調査を行い、回答者の基本属性ばかりか、生活意識、階層/格差に関する意識、社会問題に関する意識、対外/国際認識などの項目に対するデータを集めた。

これをもとに、時系列分析を実施。暮らし向きが向上したとする意識が政府に対する肯定的な評価に繋がっている、従来のパターンに変化は見られないものの、地域アイデンティティが強く表出されるようになっているなどの変化が見られるなど、興味深い知見が得られた。成果の一部は、9つの国際集会で報告されている。

研究成果の概要(英文)：The third wave of Four City (Tianjin, Shanghai, Chongqing, and Guangzhou) was conducted in 2014 after eight year interval from 1998 and 2006. Sample size in each city was roughly 1,000. The survey included questions about targeted citizen's (1) social life, (2) evaluation toward inequality and social problems, (3) perception toward foreign influence, and so on.

Chronological analysis of the survey data reveals the fact that former pattern in which respondent's sense of betterment of his standard of living is contributing to high evaluation toward government's performance has not changed while some interesting changes, including intensifying local identities in each city, have been identified. Some of these findings were reported in nine international meetings.

研究分野：社会学

キーワード：第三次四都市調査 時系列調査 社会変動モデル 中国 グランデッド・セオリー

1. 研究開始当初の背景

(1)2000年代になって中国でも階層研究が実施されるようになってからというもの、急ピッチでデータベースの構築が行われつつある。とりわけ、中国人民大学のCGSS(中国版ジェネラルサーベイ)は質問項目や調査地点のカバレッジでは、世界で最良のものとなっている。また質問の一部は日本や韓国、台湾との比較も可能であり、その利用可能性への評価が高い。同一のサンプリング方法を用いていないものの、中国社会科学院社会学研究所が主催した階層調査も、時系列調査を実施するようになってきている。

(2)中国以外の地域で、中国の階層状況や社会変動をトレースすることができる調査は、われわれが行ってきた第一次、第二次四都市調査を除いてない。海外の研究者による調査に関しては、2004年にハーバード大学のMartin Whyte教授が北京大学の潘銘銘教授らと共同で行った不平等に関する全国調査(サンプル数3,264)が有名だが、残念ながら一時点での調査で、時系列的な分析とはなっていない。このように、中国人研究者以外の手による調査データの収集という点では、われわれの四都市調査のデータは世界最高水準にあり、中国人研究者によるデータをも含め、最良の時系列分析ができるものとなっているといえる。

(3)もっとも、二時点での時系列分析には、結果的に得られた趨勢が一時的なものか比較的長期的なものかを判別しがたいという、方法的な困難がある。上述の四都市調査以外に、天津だけを対象に定点観測調査を実施し、従来の知見が比較的安定的な趨勢のもとにあることは確認して知見もあるが、地域による偏差の存在も否定できない。何より、前回調査からの中国社会の変化を踏まえ、追加すべき調査項目もある。特に日中関係が緊張し、中国の近隣諸国との関係が世界的にも注目されるようになってきていることから、富裕化しつつある市民が、どのように世界を認識しているかといった調査項目はぜひとも入れ込みたい。そして、中国社会の変化と対外認識とがどのように結びついていないのか、検討する必要がある。本プロジェクトは、こうした背景にあって実施されることになった。

2. 研究の目的

中国の台頭が世界的に注目されている今、その社会変動の実相について、長期的かつ実証的な視点にたった分析が望まれている。研究代表者は、中国の二時点での四都市調査(天津、上海、重慶、広州)を実施したが、今回は第三次調査を実施し、三時点での調査データに基づく中国の社会変動モデルの構築を目指す。同時に統合データを作成し、データの公開を進めることで広く研究者による分析を促すよう工夫する。世界各地の中国研究機関

と連携し、本データを利用したセミナーを実施し、中国社会の変動を分析・解釈できる世界的ネットワークを構築したい。

3. 研究の方法

2014年11月15日から2015年1月31日にかけて、以下の調査地点で調査が実施されることとなった。これらの地点は第二次調査のものと同じである。

天津市：和平区体育館街、河西区挂甲街、河東区盤山道街、河北区光復道街、南開区澄江路街、紅橋区邵公庄街

上海市：芦湾区淮海中路街道、南市区小東門街道、普陀区石泉街道、徐匯区田林街道、静安区石門二路街道、閘北区大寧街道、長寧区江蘇街道、楊浦区延吉一村、黄浦区金陵街道、蛇口区広中路街道、浦東德州六村

重慶市：渝中区解放碑街道、渝中区南紀門街道、沙坪壩区渝培路街道、江北区華新街街道、南岸区龍門浩街道、九龍坡区楊家坪街道

広州市：東山区大東街、東山区大塘街、東山区珠光街、東山区華樂街、越秀区人民街、越秀区東岡街、荔湾区站前街、荔湾区秀麗街、海珠区新港街、海珠区南石頭街、天河区天河南街、天河区林和街、芳村区、黄浦区、白雲区

サンプルサイズは、天津で1004、上海で1004、重慶で1000、広州で1013となっている。サンプリング方法は系統抽出法を用い、戸主(ほとんどが男性)とその配偶者(そのほとんどが女性)を半々にして調査対象者を決めた。これらのサンプリング方法も、第一次調査から変わっていない。

4. 研究成果

(1)2015年度は、前年度3月に完成した第三次調査のデータを利用して、その初歩的な分析結果を報告。各方面からのフィードバックを得ることに専心した。

6月12日に東京大学東洋文化研究所で行われたWorkshop on “Socio-psychological Approaches to China Studies: Challenges and Prospects”で “Why Chinese Citizens are so Positive toward Party and Government?: Chronological Analysis of Four-city Survey, 1998-2014,”と題する報告を行い、同ワークショップに出席したオクラホマ大学のPeter Gries教授からコメントをもらい、解釈図式をブラッシュアップした。

その後、11月13日にはUCバークレー校東アジア研究所主催の講演会(招聘人Kevin O'Brien教授)、2016年2月15日におけるシンガポール南洋理工大学Master of Arts in

Contemporary China でのゲスト・レクチャー（招聘人 Liu Hong 教授）、2月23日の財務総合政策研究所における報告会、2月24日の国立フィリピン大学アジアセンターでの講演会（招聘人 Tina Clemente 准教授）で、同種の報告を行い、招聘人からさまざまな意見を得た。

それ以外にも、David Goodman 教授 (Xi'an Jiaotong-Liverpool University,) Chen Minglu 講師 (University of Sydney)、Jane Dukett 教授 (University of Glasgow) といった海外の研究者、高原明生教授 (東京大学)、渡邊真理子准教授 (学習院大学)、関志雄博士 (野村資本市場研究所シニアフェロー) といった国内の研究者と意見交換をし、第三次調査の意義やその知見の重要性について確認することができた。

(2)最終年度にあたる2016年度は、第三次調査をもとにした研究成果をまとめ、関連する研究者を招聘したり、こちらから国際的な研究集会に出向いて行って成果を報告したりして、本プロジェクトの成果を評価してもらうことに意を注いだ。

2016年7月4日には、現地調査で協力していただいた天津社会科学の潘允康研究員を招聘し、東京大学東洋文化研究所で“Challenges of Third Wave of Four City Survey 1997-2014: From Fact Findings to Theory Building”と題する研究会を実施。潘氏は「第三次四城市調査：過程と主要発見」と題する報告を、研究代表者は“Why are Chinese Citizens so Positive toward Party and Government?: Chronological Analysis of Four City Survey”と題する報告をそれぞれ行い、フロアとの意見交換を行った。

また2017年3月13日には、同様に東京大学東洋文化研究所で International Workshop on “From Accumulation of Data to the Creation of Grounded Theories: Challenges of Sociological China Study”と題する研究会を実施。研究代表者は“Accomplishments of Third Wave of Four-city Survey, 1998-2014”と題する総括を報告。この研究会に招聘した3名の研究者は、中国社会を対象にした社会学的研究にあって世界の最高峰にあるが、彼らからは一様に四都市調査が実りあるプロジェクトであるとの評価を下していただいた。

海外での成果報告としては、ロンドンのSOASで開催された Joint Conference of East Asian Studies 2016 (2016年9月9日)での報告、シカゴ大学の Center for East Asian Studies における報告 (2017年1月5日)、インドの Institute of China Studies 主催のワークショップ International Dimension of the Rise of China: Dialogue between Indian and Japanese China Experts における報告 (2017年2月21日)と題する報告などがある。それ以外にも、パリ EHESS で主催

されたアジア研究に関するシンポジウム (2016年9月26日)や東洋文化研究所で開催されたハーバード大学との共催シンポジウム (2017年1月12日)などでも、別の変数に注目した報告を行い、大きな注目を得た。

国内では、日中産官学交流機構 (2016年5月25日)や東洋文化研究所 (2016年10月15日)などで、本プロジェクトで得られたデータの一部を利用して「中国台頭の国際心理：内外の温度差を中心に」と題する講演を行った。

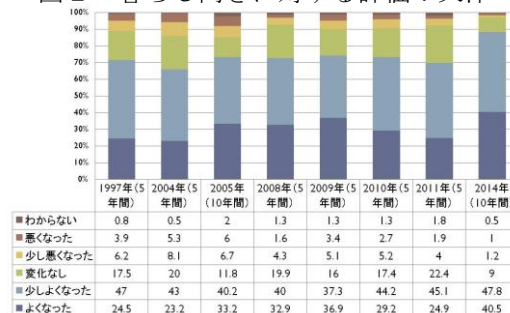
(3)今回の第三次調査によって得られた知見は多々あり、上述のように、調査結果を発表する過程で世界各地の中国研究者と意見交換をすることができたが、今回の調査プロジェクトで最大の成果は何かと問われれば、第二次調査までの成果通り、中国社会が外部で議論されているほどに不安定ではなく、中国共産党のガバナンスに安定性が見られる点が確認されたことだろう。

図1は、天津市だけに限定した場合の政府に対する信頼感の時系列的な変化を、図2は、同様に過去の暮らし向きとの対比に関する時系列的な比較をそれぞれ示したもののだが、後者が前者を規定する構造は、最初に研究を始めた1997年から変化していない。

図1 「党と政府は人民にとって何がよいかを知っている」：天津



図2 暮らし向きに対する評価：天津



(4)4年間のプロジェクトの成果として、12本の論文、6冊の書籍、2本の書評、37回の口頭発表・報告がなされたが、特筆すべきが海外での口頭発表・報告の多さ(17回)である。科研費の助成を得られなければ、これほど広い範囲での意見交換は不可能だった。感謝したい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 12 件)

①園田茂人、「社会調査でここまでわかった中国の最新結婚事情」、『文藝春秋 SPECIAL 夏』、査読無、2016、pp.194-202、<http://gekkan.bunshun.jp/articles/-/1907>

②園田茂人、「中国の台頭を世界はどう受け止めているか」『UP』5月号、査読無、2016、pp. 5-11.

③園田茂人、「中国人エリート学生の意識調査にみる『中国』」『東亜』2月号、査読無、2015、pp. 2-3.

④園田茂人、「第三次四都市調査の困難」『東亜』5月号、査読無、2015、pp. 2-3.

⑤園田茂人、「『政府高信頼説』の謎を解く」『東亜』8月号、査読無、2015、pp. 2-3.

⑥園田茂人、「社会安定と“有中国特色”格差社会的誕生」日本人間文化研究機構現代中国区域研究項目編『当代日本中国研究 第四輯 歴史・社会』社会科学文献出版社、査読無、2015、pp. 241-257.

⑦園田茂人、「『社会爆発仮説』をめぐって」『東亜』2月号、査読無、2014、pp. 2-3.

⑧園田茂人、「注目される『動く中国人』の役割」『毎日新聞』2月10日付東京本社版夕刊・文化面、査読無、2014.

⑨園田茂人、「中国の台頭をめぐる内外の温度差」『東亜』5月号、査読無、2014、pp. 2-3.

⑩園田茂人、「『中国をどう見るか』という重要な課題」『東亜』11月号、査読無、2014、pp. 2-3.

⑪園田茂人、「社会の変化：和諧社会実現の理想と現実」、高原明生・丸川知雄・伊藤聖編『東大塾 社会人のための現代中国講義』、東京大学出版会、査読無、2014、pp. 237-261.

⑫園田茂人、「まだ来ぬ政治の時代と中国理解」『書齋の窓』10月号、査読無、2013、pp. 75-79.

[学会発表] (計 37 件)

① Shigeto Sonoda, “Is Local Identity Declining in Mega Cities in China?: Chronological Analysis of Four-city Survey Data, 1997-2014,” Harvard -UTokyo Conference, “Asian Cities: Hubs of

Interaction, Tradition and Transformation”、2017年1月12日、東京大学東洋文化研究所大会議室（東京都・文京区）

② Shigeto Sonoda, “Chinese Views on International Affairs: An Analysis of Four-city Survey Data, 2006-2014,” International Workshop on International Dimension of the Rise of China: Dialogue between Indian and Japanese China Experts, 2017年2月21日、デリー（インド）

③ Shigeto Sonoda, “Accomplishments of Third Wave of Four-city Survey, 1998-2014,” International Workshop on “From Accumulation of Data to the Creation of Grounded Theories: Challenges of Sociological China Study”, 2017年3月13日、東京大学東洋文化研究所大会議室（東京都・文京区）

④ Shigeto Sonoda, “Why are Chinese Citizens so Positive toward Party and Government?: Chronological Analysis of Chinese Four-city Survey, 1998-2014”, Joint Conference of East Asian Studies 2016 Panel 59, 2016年9月9日、ロンドン（イギリス）

⑤ Shigeto Sonoda, “‘Asia’ in the Eyes of Asian: Analysis of Asian Student Survey First Wave Data”, GIS-ASIE: What is Asia?: Moving Boundaries and Identities on Contemporary Asia, 2016年9月26日、パリ（フランス）

⑥ Shigeto Sonoda, “Is the Rise of China a Threat or a Chance?: Analysis of 2nd Wave Asian Student Survey and 3rd Wave Four-city Survey”, NTU-UTokyo Joint Conference, 2016年11月30日、台北（台湾）

⑦ Shigeto Sonoda, “Asian Youth and China’s Rise: A Threat or an Opportunity? - Commenting the Results of the 《Asian Student Survey 2013》”, 2015年2月19日、Lecture at Institut national des langues et civilisations orientales, パリ（フランス）

⑧ Shigeto Sonoda, “Why Chinese Citizens are so Positive toward Party and Government?: Chronological Analysis of Chinese Four-city Survey, 1998-2014”, 2015年11月13日、Lecture at Institute of East Asian Studies (IEAS), Center for Chinese Studies (CCS), University of California Berkeley, バークレー（アメリカ合衆国）

⑨Shigeto Sonoda, “Reexamining Myth of the Social Volcano: Challenges and Attainments of Chinese Four-city Survey, 1997-2006” International Workshop on “Middle Class and Social Change in Contemporary China”, 2014年1月24日、東京大学東洋文化研究所大会議室（東京都・文京区）

⑩Shigeto Sonoda, “Is Rise of China a Threat or a Chance? : A Comparative Analysis of Determinant of Perception on China in Korea, Japan, and Taiwan”, 第18回世界社会学会議、2014年7月16日、横浜みなとみらい（神奈川県・横浜市）

⑪園田茂人、「アジアのアジア認識図」、アジア政経学会設立60周年記念シンポジウム：アジア研究における「ボーダー」の意味とその変化、2013年6月15日、立教大学5号館1階5123教室（東京都・豊島区）

⑫Shigeto Sonoda, “Comparing Citizen’s Evaluation toward Environment Issues in Asian 13 Mega Cities: Some Research Findings of AsiaBarometer 2003-08,” New Tendency of Urban Transformation in East Asia: International Symposium, 2013年9月29日、北京（中国）

〔図書〕（計 6 件）

①園田茂人・新保敦子、ハヌル社、『中国の教育（ペク・ケムン訳）』、2017、187

②園田茂人・蕭新煌編、東京大学出版会、『チャイナ・リスクといかに向きあうか：日韓台の企業の挑戦』、2016、247+10

③毛里和子・園田茂人編、ハヌル社、『中国問題（イ・ヨンビン他訳）』、2016、347

④園田茂人編、勁草書房、『連携と離反の東アジア：アジア比較社会研究のフロンティアⅢ』、2015、255+xi

⑤園田茂人編、社会科学文献出版社、『日中関係40年史（1972-2012）Ⅲ社会・文化巻（馬静・周穎昕訳）』、2014、264

⑥園田茂人編、社会科学文献出版社、『日中関係40年史（1972-2012）Ⅳ民間巻（王禹・韋和平訳）』、2014、192

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

園田 茂人 (SONODA, Shigeto)
東京大学・大学院情報学環・教授
研究者番号：10206683

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

高原 明生 (TAKAHARA, Akio)
東京大学・大学院法学政治学研究科・教授
研究者番号：80240993

加茂 具樹 (KAMO, Tomoki)
慶應義塾大学・総合政策学部・教授
研究者番号：30365499

中岡 まり (NAKAOKA, Mari)
常磐大学・国際学部・准教授
研究者番号：80364488

(4) 研究協力者

なし